平成 27 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	管 27Ｋ07	氏　名	久保田　直人
研究主題 ―副主題―	判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを表現できる児童を育む 文学教材の授業づくり ―「読み声の交流」を核として―		
所属校	世田谷区立松丘小学校	派遣先	創価大学教職大学院

項　目	内　容
Ⅰ　研究の目的	中央教育審議会（平成 26 年 11 月 20 日）「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」において「我が国の子供たちについては、判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べることについて課題が指摘される」と述べられている。 平成 27 年度「全国学力・学習状況調査」小学校国語の東京都の結果では、国語Ｂ「読む能力」を対象とした設問の正答率は 68.6%（全国平均 68.1%）であった。また設問「３二」の「声を出して読むときの工夫とその理由を書く」という設問は正答率 64.7%（全国平均 66.6%）、無回答率は 17.9%（全国平均 15.1%）であった。 これらのことから、東京都の児童においても判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べることに課題があると考えた。 そこで、筆者は、「読み声の交流」を取り入れることにより、この課題を解決しようと考えた。(「読み声の交流」とは、叙述をもとに想像したことなどを、音読や説明することを通して友達と交流すること)
Ⅱ　研究の方法	「『読み声の交流』を核とした文学教材の授業を行うことで、判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを表現する力を育むことができるのではないか」という仮説について検証するために以下の二点に取り組む。 １　「国語の学習」に関する質問紙調査を検証授業前の９月 24 日（木）と、検証授業後の 10 月９日（金）の２回行い、児童の意識の変容を調べていく。 ２　検証授業の計画を立て、都内公立小学校で、「ごんぎつね」の授業実践を行い、抽出児童の授業中の発言、振り返りの記述内容を分析する。
Ⅲ　研究の結果	１　「国語の学習」に関する質問紙調査の結果分析 今回は国語の授業で「読み声の交流」を行うことによる児童の意識の変容を見ていくために、授業実践前と授業実践後、第４学年児童 35 名を対象に質問紙調査を行った。そのうち、授業前と授業後の両方に回答を得た児童が 31 名であった。４件法の尺度に１点（あてはまらない）～４点（あてはまる）を割り付け、その結果を SPSS の t 検定で分析したところ、設問３「二つ以上の語や文を根拠にして、登場人物の気持ちを想像できる」、設問６「交流活動のとき、自分の考えを友達に説明できる」という二つの設問に対する検証授業後の平均値が、検証授業前に比べ、有意に高かった。 ２　抽出児童の検証授業における発言内容および振り返りの記述内容の分析 設問３「２つ以上の語や文を根拠にして、登場人物の気持ちを想像でき

	る」について
	○プラスの変容をしているＡ児 ・根拠と理由を示しながら自分の考えを書くことができていた。 ・複数の根拠に基づいて理由付けをし、自分の考えを書くことができるようになった。 ・分かりやすく説得力のある理由付けをすることができていた。 ○マイナスの変容をしているＢ児 ・根拠と理由を示しながら自分の考えを書くことはできていたが、分かりやすく説得力のある理由付けを意図的にすることができていなかった。 設問６「交流活動のとき、自分の考えを友達に説明できる」について ○プラスの変容をしているＣ児 ・クラス全体に向けて発言する機会が多く、１時間の授業内で、複数回発言していることがあった。 ・根拠と理由を示しながら自分の考えを発言することができていた。 ・複数の根拠に基づいて理由付けしながら自分の考えを発言することができていた。 ○マイナスの変容をしているＤ児 ・クラス全体へ向けての発言は、教師によって指名されたときの１回だけだった。 ・少人数内において４回発言をしていた。内容は全て、友達の音読の工夫についてよいところを伝えるものだった。 ・根拠と理由を示しながら自分の考えを表現することができていた。
Ⅳ　考察	１　成果 本研究の成果として、二点挙げる。 第一に、質問紙調査の分析結果や抽出児童の姿から「『読み声の交流』を核とした文学教材の授業を行うことで、判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを表現する力を育むことができるのではないか」という仮説について妥当であるとの道筋が見えたことである。 第二に、「二つ以上の語や文を根拠にして考えること」や「友達に説明して分かってもらおうとすること」が「読み声の交流」や読解そのものの向上に有効に働く可能性があるということである。 ２　課題 本研究の課題として、三点挙げる。 第一に、仮説の検証に対するサンプルデータを増やしていくことである。他教材や、他学年の児童に効果があるのか検証していきたい。 第二に、今回取組が弱かった少人数グループでの「読み声の交流」が、判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを表現する力を育むのに有効かを検証することである。発言が苦手な児童の力を伸ばしていく上でも重要だと考える。 第三に、「読み声の交流」の評価の在り方について考えていくことである。児童が学びの実感を得るためにどんな評価が必要かを考えていく。